

パレット・レターは「子ども若者発達支援センター」からのお知らせです。

パレット・レター

No.18

Jun 2019



2019年6月5日発行

思春期の 吃音。場面緘黙 について

5月8日には三島西中学校で、5月22日には、三島東中学校で、先生方を対象として開催された研修会に、Paletteの言語聴覚士と相談員が、講師として参加させていただき「思春期の吃音・場面緘黙について」と題して、お話しさせていただきました。

吃音とは、言いたい事が頭に浮かんでいるのに、その言葉がスムーズに出せない症状をいいます。また場面緘黙とは、他の状況では話しているにもかかわらず、話すことが期待されている場面では、話すことが一貫してできない症状をいいます。

研修では、吃音の問題はその症状の大小ではなく、吃音による本人の不安や恐れなどの心理面の問題であること、そしてその心理面の問題は、聞き手の反応（環境）に大きく左右されることをお話しさせていただきました。



三島東中学校



三島西中学校

そして、吃音のある生徒が学校生活を安心して過ごせるために、先生自身に気をつけていただきたいこと、また、聞き手となる他の生徒が吃音を理解し、寄り添うことができる人になれるよう導いて欲しいとお願いしました。

また場面緘黙の多くは、集団生活つまり学校で起こっているため、先生方には吃音同様に「安心できる環境」づくりのお願いと、そのための工夫を紹介しました。

東中学校では、先生方から、吃音・場面緘黙に関するご自身の経験を話いただき、Paletteを含めた会場の皆さんで情報を共有しました。



吃音も場面緘黙も「正しく理解すること」「寄り添うこと」が最も大切です。Paletteは、この2つの大切さを多くの方に理解していただくためにも、こういった研修や出前講座などを、これからも続けていきたいと思っています。

子ども若者発達支援センター会報

パレット・レター

- 発行 -

四国中央市子ども若者発達支援センター

TEL 0896-28-6029 FAX 0896-28-6030

palette@city.shikokuchuo.ehime.jp

Palette またはパレット・レターに関するお問合せは上記まで。

パレット・レターの表紙になってくれるお子さんを募集します。
ご協力いただける方は、Paletteの職員または上記までご連絡ください。



カラー版のパレット・レターはこちらで見ていただけます



Palette公式ウェブサイトはこちら

今年も こまどり号が 来てくれました。

今年もこまどり号に Palette に来ていただき、児童発達支援センターを利用しているお子さんと保護者さんに、歯科検診や歯科保健指導をしていただきました。



「歯みがきは習慣がつくまで嫌がるお子さんも多いですが、小さいうちから根気強くあきらめず頑張ってください」とのことでした。



また、虫歯になってから歯科に通うのではなく、気軽に相談できる、かかりつけ歯科をもつことを、勧めていただきました。そうすることで、歯科に慣れながら、虫歯を予防していくことにもつながるそうです。

なお、児童発達支援センターでは、この歯科検診のほか年2回の内科健診など、利用者の健康管理のお手伝いをしています。



フリータイムで シュネーバルを 作りました。

「シュネーバル」は、ドイツ語で『雪の玉』という意味で、ドーナツのようなクッキーのような揚げ菓子です。

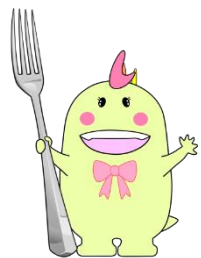
事前に、職員が家で試作してみたところ上手くいかず、そのことを利用者さんに相談すると、すぐに違うレシピを準備してくれました。

ひも状に切り込みを入れた生地（１）を団子状にする（２）、というのがこのお菓子の特徴で、生地作りは簡単ですが、成形が難しいお菓子でした。出来上がった団子を揚げて（３）、粉糖をまぶして完成です。（４）ベーキングパウダーを入れたため、ふんわり膨らんだシュネーバルは、ひも状のところがカリカリでもとても美味しかったです。

次回のメニュー決め当番さんは「甘い物が多いから、今度はしょっぱい系」と考えてくれているようです。



4



1



2



3



BOOK Preview

「自閉症・アスペルガー症候群
「自分のこと」のおしえ方
—診断説明・告知マニュアル—

著者・吉田知子／出版・学研プラス



「なんで僕は〇〇クラスなの?」「どうして私は〇〇に行かなきゃいけないの?」

支援を受ける理由をお子さんに聞かれたら、どういう答えを思い浮かべられますか?

「大人になって、自分で相談機関やサービスを利用するためには、いつか告知は必要...(でも、小さいうちはまだいいかな?)」というのが一般的な考え方もありませんね。この本によると、「自分が他の子と違う」という感覚をもち始めるのは、小学校入学の頃からだそうです。聞かれた時に、とっさにどういうふうに説明されるでしょうか。

この本では、一貫して「脳タイプの違いです。そこに優劣はありません(例えば血液型に優劣なんてありませんよね?)」という論調で進むので、マイナスイメージは全くありません。とにかくいい所に注目して、少数派ゆえの生きづらさは、工夫でなんとか乗り切ろうと考えます。これなら、告知の副作用である、「自分分はダメだ」と思うのではないか」という心配はなくなりますね。

訊かれた時に、どう説明するか:そこに、「説明者はどうとらえているか」が表れます。この本を読むことで、お子さんとその特性に対するとらえ方が、いい意味で変わることを期待しつつ...

告知について考えられたことがある方も、全く考えたことがない方も、ぜひお手に取ってみてください。

